

臨床心理学部における実験査定および学外見学実習の学び

須 藤 春 佳・大 谷 祥 子・高 橋 紀 子

はじめに

大塚（2004）は、「臨床心理学」成立のプロセスを概観した上で、「臨床心理学とは、生身の人間に親しく臨んで、その人の訴える問題（望み）の解決や発展に資するための心理学的原理と技法を研究し、それらの実践的活用を図る心の科学である。また心の健康生活に寄与するための心の科学でもある。」という定義を示している。その成立過程を見ても、臨床心理学と“実践すること”“実際に人間に関わること”は分かちがたく結びついている。そのため、臨床心理学の教育を考える際も、実践者（臨床心理士）の養成がテーマとなりやすく、中心的に論じられるのは大学院教育、ということになる。そして、学部での教育については、その基礎部分を担う、という位置づけで語られることも多い。しかしながら、学部において「臨床心理学」を学ぶことは、それだけに留まらない意義を持ちうると思われる。

1996年の開学と同時に臨床心理学科（人間学部）を開設し、2008年度には日本初の臨床心理学部を開設した京都文教大学では、現在、一学年あたり200名を超える学生が臨床心理学を学び卒業している。入学してくる学生も、大学院進学を目指す者ばかりではなく、学部において臨床心理学を学び、卒業した後は一般企業等への就職を希望する者が多数含まれている。京都文教大学臨床心理学部のカリキュラムは、

専門科目講義の他、実習や演習などの「体験」を重視した構成となっている。中でも2回生から卒業までの間に多くの学生が履修する科目のひとつとして、「心理学実験査定（初級）Ⅰ、Ⅱ」及び「臨床観察実習」などがあり（表1）、筆者を含め8名の講師で担当している。

本論では、これらの実習の内容を概観し、現状においてそれぞれの授業がもたらしている効果について検討する。そして大学学部において、臨床心理学教育が果たしうる役割について考えてみたい。

表1 心理学実験査定と臨床観察実習の履修時期

	心理学実験査定		臨床観察実習
	春学期	秋学期	通 年
2 回生	初級Ⅰ	初級Ⅱ	2 回生秋学期から
3 回生	中級 A	中級 B	履修可
4 回生			ただし 3 回生からの履修を推奨

Ⅰ. “こころ”をはかるとは？－「心理学実験査定」の授業を通した学び－

京都文教大学では、2回生になると、「心理学実験査定（初級Ⅰ・Ⅱ）」という実習授業が開講され、3回生になると「心理学実験査定（中級）」が開講される。大学入学後1年を経て、いよいよ本格的に心理学を学び始める時期に始まる授業であるが、この実習授業は、その名の通り、心理学の「実験」と「査定（アセスメント、心理検査）」を体験的に学ぶ授業であり、2

回生の春学期は、「心理学実験（初級Ⅰ）」を、秋学期は「心理学査定（初級Ⅱ）」を行っている。ここではそれぞれの授業について紹介することとしよう。

1. 実験や調査を通して“こころ”を測る

(1) 実験査定（初級Ⅰ）の内容

春学期には、実験心理学的なスタイルの実習授業が行われ、授業の中で、「記憶」や「認知」領域等、基礎的な心理学の分野に関する実験を扱う。授業はおおむね次のようなスタイルをとっている。①受講生が実験（調査）を実施→②データを収集→③結果の整理→④結果の分析と考察（レポート作成）。大まかな授業の流れと内容は、表 2 のようになる。

例えば、記憶の実験として行う「語の記銘」では、「“一定の時間間隔において記憶の課題に取り組む場合”と、“短期間に集中して記憶の課題に取り組む場合”では、どちらがより記憶されるか？」について調べるため、実験を行い、データをとって検証していく。この実験は、日常生活のなかで例を挙げれば、暗記する課題テストの際に、一週間前からコツコツと勉強した場合と、直前に一気に勉強する（一夜漬けの勉強）場合、どちらの方が良い成績が出せるか？という事象に関わるような、記憶のメカニズムを検証するものである。この授業を通して、

心理学とは、われわれの身近な行動に関連したこころのはたらきやメカニズムを扱う学問であるということが感じられるだろう。また、「質問紙調査法」では、人間のパーソナリティ傾向や心性を図る質問紙尺度を組み合わせて被験者に実施する。実施にあたっては、まず受講生が自分たちで仮説を立て、調査を通し検証していく。例えば「自尊心の高い人は、攻撃性が低い」という仮説を立てて調査を行い、結果を出した後、上の仮説が結果と一致していたか（仮説が支持されたか）、あるいは一致しなかったか（仮説が支持されなかったか）を検討する。質問紙調査法では、他の実験に比べて人間の内面を扱う内容となるので、臨床心理学的な思考も必要になる。たとえば「自尊心の高い人ほど、攻撃性が低い」という結果が出た場合、どうしてそのような結果になったのか、背後にある心理的メカニズムを考える作業が必要となり、人間の心理やこころの働きについて学ぶ機会になるのである。たとえば、受講生たちの考察例には次のようなものがみられる。「自分をこれでよいと思っている人ほど、自分に自信があり、他人にも優しくなれるから」、「自分に自信がある人は、自分の意見をしっかりとっている。だから自己主張する傾向が高くなる」など。そして受講生たちがこれらの考察を交換し合う中で、心をとる現象についての考え方を広げてゆく

表 2 実験査定（初級Ⅰ）の流れ

流 れ	内 容
オリエンテーション （# 1）	レポートの書き方について：心理学の論文の形式（問題・目的・方法・結果・考察）に沿った形でのレポート作成の心得を伝授。
実 習 （# 2～# 14）	①受講生が実験（調査）を実施 ②データを収集 ③結果の整理（平均値や標準偏差を算出し、図表にまとめる） ④結果の分析と考察（統計的検定を行い、データに基づき結果を考察） ⑤レポート作成（各自、実験レポートを作成する）

実験や課題の内容：「ミュラーリヤーの錯視」、「語の記銘」、「鏡映描写課題による両側性転移」、「観察法の初歩」、「質問紙法調査」など。

こととなる。そして、結果が出た場合も出なかった場合も、どちらも「なぜ、そのような結果になったのか」について考える作業が重要である。

また、この実習を通して、心理学の中にある「概念的定義」についても学ぶこととなる。たとえば「攻撃性」という概念ひとつをとっても、その定義にはさまざまなものがあり、多くの質問紙尺度が作られている。調査を実施する際に、使用する質問紙尺度がどのような定義の概念（上の例で言うなら「攻撃性」）を測っているのかについて考えることが大切である。「こころ」という、目に見えないものを、目に見える形で取り出し分析するためには、自分たちが調べようとしているこころの事象に関する定義、すなわち「概念的定義」を明確にさせ、正しくそれらが測られているのかを検討する作業が重要になる。

以上、この授業での体験は、こころの現象とその背後にあるメカニズムやそこに働いている様々な要因について考える訓練になるとともに、心理学の実験や調査を通して、「こころ」を扱う学問を学ぶ者としての基礎的ルールや言葉の使い方、客観的な態度で物事を捉える姿勢を身につけていくことを狙っている。受講生たちは、「こころ」という目に見えない現象に一定の法則性があることを検証するためには、数多くの手順が必要であることを学ぶ。そして、それらをふまえることによって、こころの現象の法則性を示すことができるのを知るのは、学ぶものにとって、大きな達成感と喜びになるのではないだろうか。

(2) 授業での学びと得られるもの ―数値に示された“こころ”の現象の読み取りと客観的思考のトレーニング―

受講生たちは、実験を行ったあと、結果に表された数字の意味を読み取っていくことになる

が、最初は苦勞する人も多い。与えられたデータの数字が意味するものは何か？を読み取ることが第一の関門となる。次に、値の大小比較をして、どちらの条件がどちらの条件よりも「大きい」あるいは「小さい」と示すために、統計的検定を行う。値の大小を読み取るだけでは不十分で、統計的検定を行わないと値の大小を言うてはいけないので、受講生たちには結果を出せるまでの道のりは長く感じられることもあるようである。だが、このように、一つ一つのステップを踏む中、徐々に、データに基づいてものを言うという、実験心理学の方法に則った、科学的思考のスタイルを身につけていくことになる。

この授業を通して受講生たちが身に付けられるものとしては、次のようなものがあるだろう。まずは、①データに基づいてものを言う姿勢や、筋道を立ててものを考える力。すなわち、決して自分の主観に偏らない、データに基づく客観性をもった、説得力のある思考を鍛えることになる。また、②自分の考えを他者にわかるように伝える力。レポート作成を通した文章表現力、ともいえよう。筋道を立てて、第三者にもわかるような形で文章を書くことを意識して、実験結果を伝える力が培われる。いわば、科学的思考力をつけ、それを表現するための鍛錬を行っているともいえる。

このように、人間の心の傾向について、自然科学的手法に基づき、データを取って実証的に検証するということは、臨床心理学の歴史的基盤となっている、実験心理学の学問スタイルを学ぶことでもある。まずは多くの人に共通するこころの法則性に関する傾向を捉える学びがあった上で、個別事例や個人の特徴を描き出し捉えてゆく訓練をするという流れが、臨床心理学の教育課程として求められている。

河合隼雄（2003）は、臨床心理学を専攻とす

るものが、直接的に臨床の実際と結びつかないような、科学的方法を用いた実証的研究を行うことの意義を、師であるクロッパ教授から「臨床心理士の ego-strength の強化のため」と言われたことを示しており、また河合自身もそのように言っている（心理臨床学会 2001 ワークショップでの講演）。この背景には、「臨床心理の実際においては、治療者とクライアントの主観と主観のかかわりが重要になるが、この際、治療者の ego-strength が弱いと、クライアントに巻き込まれてしまって治療が進展しないどころか、失敗につながることもある」ため、「少なくとも一度は、ある程度客観的なアプローチを経験しておくべきだ」（河合，2003）という考えがあることが示されている。臨床心理学を志す学生が、臨床心理学的アプローチによって、一人の主観的態度をもった他者に出会うとき、相手の主観的態度を知ると同時に自らの主観的態度を知ることが必要となる。そのためには、まず、客観的思考というものを知り、主観的なものの見方と客観的なものの見方の両者を区別できるようになることが必須であろう。そのような意味で、臨床心理学的援助に携わる以前の学部の段階で、客観的思考、客観的アプローチを学ぶことによって自我の強さを鍛えておくことは、臨床心理学的なアプローチを行う上でも重要な意味をもつといえよう。また、主観的なものの見方と客観的なものの見方のそれぞれを知り、両者を包括する視点をもって物事に対処することは、大学を卒業して社会人としてやっていく上でも、必要となる資質であるといえるだろう。

(3) 学生たちにとっての体験

この授業は、京都文教大学の実習授業の中でも、学生たちにはとりわけ「大変」と感じられているものであるかもしれない。毎週のように

実験や分析を行い、定期的にレポートを提出する、時にはグループメンバーで意見を出し合いまとめる…このような授業を終えたあとの学生たちの感想には、「想像していたより大変だった」、「レポートが多くて大変」というものも見受けられる。一方、「新しい知識に触れることができた」、「作業は大変だったが色々な意見にふれることができて有意義だった」などと、苦勞し努力したからこそ得られたものもあったと感じている受講生の姿もみられる。この授業は、いわば、心理学を学ぶ学生として、一定のスタイルを身につけるための登竜門のような授業であり、一種の「イニシエーション（通過儀礼）」を受けるようなものといっても過言ではないかもしれないが、心理学の基礎や、基本的姿勢を身につける上では、欠かせないものであろう。

2. 心理検査を通して“こころ”を読み取る～心理査定の学び～

(1) 実験査定（初級Ⅱ）の内容

2 年生秋学期以降に履修可能な「心理学実験査定（初級）Ⅱ」では、心理検査を体験しながら心理査定について学ぶ。表3に示したように、質問紙法・投影法による性格検査、知能検査などの内、集団での実施が可能なものを中心に扱っている。なお、3 年生以上では、ロールシャッハテストや WAIS-Ⅲ など、個別法での検査体験も含め、より時間をかけて一つの内容に取り組む「心理学実験査定（中級）」の履修も可能である。

表3 心理学実験査定（初級Ⅱ）で扱う主な検査
(2008 年度)

質問紙法	YG 性格検査、TEG、MMPI
知能・発達検査	京大 NX 知能検査、バンダーゲシュタルトテスト
投影法	TAT、HTP 法、P-F スタディ、SCT

心理査定の授業は、①受講生自身が心理検査を受けること、②それぞれの心理検査の実施・解釈法及び成り立ち・性質などを学ぶこと、③検査結果を読み取り所見の形式でまとめたレポートを提出すること、を基本の形として実施している。②の内、解釈法については、検査によって、既存の方法を学ぶことに重点を置く場合と、自分たちで解釈の視点を練ってみるということに重点を置く場合がある。

授業の進め方で全体として重視されていることは、受講生同士のディスカッションを通して、受検時の気持ちの動きや、その検査の結果からどのようなことがなぜ読み取れると考えられるか、など、受講生自身が考える時間を十分に取ることである。その際、まずは自分自身の体験を振り返り、言葉にした上で、複数の他の受講生と意見交換を行うというプロセスが重要となる。「楽しかった」「苦痛だった」など素朴な感想一つにも受講生それぞれで大きな幅が出る。それぞれの“わたしの体験”だけにとどまらずに、異なる感じ方や意見とのすり合わせ作業を行うことを通して、一人ひとり違う相手に接していく検査者の心がまえや、一見全く違う体験の元にあるその検査や検査状況の性質について、より深く考えていくことができる。

(2) 査定の学びがもたらすもの

臨床心理学を学ぶ中で、このような心理査定に関する内容に触れることは基本メニューのひとつになっている。臨床心理専門職（臨床心理士）を目指す場合はもちろん、そうでない場合にも、学部教育の中で実習を基盤として心理査定を学ぶ意義は大きいと思われる。ここで、心理査定の学びがどのようなことに通じるのか、改めて考えてみたい。

＜既存の“ものさし”を吟味する視点を持つ＞

受講生の様子を見てみると、特に査定に触れるはじめの頃には、一つの検査から一対一対応で自分の性質が言い当てられるのではないかと、いった大きな不安（と期待）を持っていたり、その検査がなぜそれを測っていると言えるのかについても「既存の検査なのだからちゃんとしているのだろう」といった漠然とした信頼をほとんど意識せぬまま持っていたりすることが多いように思われる。少し学び始めると、今度は「検査は人の一面しか見ていないので、この結果は無意味である」というように、全否定に傾いたりもするが、そうこうしてひとつ学年が上がる頃には、限界のある中での有効性・有用性を考えるように全体として落ち着いてくる印象がある。

このように個々の検査について特徴や限界を学ぶことは、それ自体もちろん大切であるが、検査の特徴や限界を“見る目”を養う、という点も大きな意味を持っている。高石（2000）は、心理アセスメントを学ぶ理由の一つ目として、「テストに管理されないため」ということを挙げ、「中途半端な知識はかえってあからさまな誤解や偏見を生む。たとえ心理テストで遊べても、それが何を測り何を測らないか、どのような限界があるかを正確に知っていないと、遊び道具は容易に凶器になってしまう」と述べている。心理検査を“見る目”を養うことは、授業で扱う検査だけにとどまらず、世の中にあふれる適性検査やいわゆる心理テスト・心理判定ゲームなどを含めた様々な既存の“ものさし”に対し、どのように確かでどのように確かでないか、どのように意味がありどのように意味がないか、見る目を持つことにつながる。あるいは少なくともそうしたことを吟味しようとする視点を持つことにつながるだろう。

＜自己に触れつつ他者と関わる＞

査定の実習では、自分自身の検査結果から読み取ったことをレポートにまとめて提出する、という作業の比重も高い。受講生からも「実験レポートを次々書くのとは違うきつさがあった」「おもかった」といった声が多く聞かれる。自分自身について得られた結果を受け止め、第三者に伝える形にまで整えて書く、というのは、ほぼはじめて心理検査に触れる学生にとってかなりのエネルギーを要する作業である。しかし、この「きつい」「おもい」体験を経ることには、所見として整ったレポートが書けるようになるというとはまた別に、その作業それ自体にも意義があるように思われる。

馬場（2005）は、実験レポートも含めた「結果を読み取り、文章で書く作業の臨床心理学的意味」として、「第三者に伝える文章を書くという行為が自分に責任をもつという意味での自立のテーマを内包しており、自分の読み取ったものを言葉として明確化し、読者に依存したり甘えたりすることなくわかるように文章化することの重要性」を指摘している。第三者へ伝えることを意識した文章を書く訓練を重ねることは、書き手の自立を促すような効果を持っていると思われる。それに加えて、自身の心理検査結果を元にレポートを書く場合は、実験レポートとはまた違った意味で、自他の関係の持ち方が問われる。結果を読み取る作業は、まさに自分自身に触れていくことである。かつそれを一歩引いた視点から第三者が読む所見として文章化するときには、自分自身をどのように他者に呈示するかという課題が加わる。何を書いて何を書かないか迷ったりもしながら、レポートを完成させて出すことを繰り返す中で、各自が自分なりのバランスのとり方を模索することになっているのではないだろうか。それは、自分自身の内面に可能な限りしっかりと目を向けつ

つ、そこにおぼれてしまわない立ち方を作っていく訓練にもなりうる。

＜見る一見られることについてのセンス＞

高石（2000）が「心理テストを自分自身で経験することによって『テストされる側』の体験を味わうこと」を、馬場（2005）が「心理検査を“実施される側”の体験から“実施する側”を見る」ことを心理査定実習の意義として挙げているように、検査を受ける体験はこの授業の柱とも言える。検査を受ける側が何をどんな風に感じるのか、ということを手掛かりにして、検査する側がなぜどういうことに注意すべきなのか、さらには心理検査というもののあり方についてなど、実感を持って具体的に考えることができる。このことは、心理検査に限らず、なにかの視点や価値観を持って人を見る、ということに対するセンスを磨くことにもなるだろう。見られる側がどのような気持ちを持つのか、それを想像する視点を持てることは、臨床心理専門職でなくとも人と関わる様々な職業における倫理感覚の基礎となる。なお、先に述べたような自分自身の検査結果をレポートにまとめるという作業の際には、受講生は見られる側の被検査者であると同時に、見る側の立場にも立つことになる。こうした構造も、見る一見られることについてのセンスを養う一助となっていると思われる。

さらに付け加えると、心理検査はそれぞれ、人の心についてのある見方に特化して磨きをかけたものであると言える。多様な検査に接することは、それぞれの心理検査の持つ視点や人間観に触れることになる。それは、自分自身の視点を相対化したり、幅を広げたりすることにも寄与するだろう。

以上、心理査定の学びがもたらすものについて、考えられることを挙げた。心理検査は、人

間のところを読み解いていくための様々な工夫が凝縮された仕掛けであり、その実習も自他のところをめぐる濃度の高い体験になりやすい。授業の実施に際しては、注意せねばならない点も多いが、適切に実施されれば、社会の中で内的外的な関係を大人として生きていく力を養う機会となるのではないだろうか。

Ⅱ. “ところ”を感じる体験—「臨床観察実習」での学び—

2 回生秋学期になると学外の施設を見学し、また現場で働く方々の話を直接聴く実習「臨床観察実習」を履修することができる。

1. 現場から学ぶ臨床心理学

臨床心理学を学ぼうとする人は、自身の体験をきっかけにところに関心を持つ傾向もある。ところというのは、ところを動かしながらいと捉えにくいものであるが故に、臨床心理学を学ぶ上ではこうした経験や実感の伴う体験はとても大切にされる。しかし個人の体験や感覚を手がかりにする方法だけでは落とし穴もある。例えば個人の体験だけをよりどころにところを理解しようとする、どうしてもその多様性や客観性を確かめることができず偏った学びになってしまう。そこで臨床心理学を学ぶ過程では、内的な体験を深める実習に加えて、外の世界に触れ、そこから心に対するニーズや役割を知ることも重要になってくる。ここで紹介する「臨床観察実習」は、そうした現状を知り、現場の視点から臨床心理学を学ぶ実践的な機会である。

「臨床観察実習」では、施設見学や現場の人の話を聴く。現状を知りそこで働く人と出会うことで、それまで個人の体験や感じ方といった内面から理解していた臨床心理学の学びを、現

場のニーズや役割、地域の特質や社会背景といった外側から臨床心理学を捉えなおす機会になる。個人の中から実感することと、外の世界から刺激を受けることの両方の体験を通して、臨床心理学の学びはより立体的なものになるのである。

2. 「臨床観察実習」の実際

「臨床観察実習」では、医療福祉・教育・司法といった心理臨床的な援助が行われている領域の施設見学を行う。さらに、そこで働いている臨床心理士や関連職種の方々に、現場での取り組みや実践活動についてのお話を伺う学内講演を受け、心理臨床現場についての実際的な理解を深めることを目的とする。

履修は2 回生秋学期以降となる。これはある程度臨床心理学を学んだ上で現場に触れたほうが、より主体的な学びにつながると考えるからである。

履修する学生は、3 領域からそれぞれ一箇所ずつ関心のある機関を選択し訪問見学を行う。また、3 領域から1 回ずつ現場で働く方の講演会が学内で開催される。最終的に学生は3つの施設を見学し、3 回講演を聴くことになる。表4を見ていただいてもわかるように、実習では行きっぱなし聴きっぱなしにならないよう、事前事後の学びもプログラムの中に組み込まれている。学生は、まず事前指導において施設やそこを利用する方や働く方についてイメージを膨らませる。そしてそのイメージの過程で浮かびあがる自分の関心やわからない部分を明確にし準備を整える。どのような服装で行くのが適切か、どういう質問ができるのか学生自身が具体的に考えてもらう。そして、施設見学を行いレポートを通して体験を言葉にまとめ、事後指導の中で他の学生と体験を分かち合うのである。改めて話し合うことで、同じ施設を見学した者同士

表4 「臨床観察実習」の流れ

流 れ		内 容	
オリエンテーション		授業目的、レポート提出についてのアナウンスの他、見学までの流れと守秘義務や服装に関する注意事項を説明する。オリエンテーション後、履修希望者を募り、履修登録を行う。	
事前指導		見学先の施設の説明、日程のアナウンスを行った後、小グループに分かれて、各施設に対するイメージや、そこで働く人たちに聴いてみたいこと、また見学先の留意点について自分たちで考え、わかちあう。	
実習	施設訪問・見学	医療福祉	精神科クリニック、家庭子ども相談センター、老人保健施設 等
		教 育	教育相談センター、適応指導教室 等
		司 法	少年院、少年鑑別所、家庭裁判所、科学捜査研究所 等
	学内講演会	3領域（医療福祉・教育・司法）1回ずつ実施	
事後指導		小グループに分かれて施設訪問の様子や感想をわかちあう。	

でも感じ方や受け取り方が違うことに気づき、新たな視点を獲得することも多いようである。

この実習を履修した学生の感想をみると、「査定で勉強していた心理検査が、現場でどう使われているのかわかった」、「心理学の理論は、クライアントを理解する時の考える軸になるみたいだ」といった声があり、大学での学びと実際のつながりや臨床心理学の全体像をイメージする機会となっていることが伺える。

また実習での施設見学に伴うタイムマネジメントや、体調管理といった経験をとおして、自立性や社会性が促進される。

3. 臨床心理“学部”で現場を感じる意義

次に、学部教育の中でこのように現場を感じる実習があることの意味について考えてみたい。

高校生と接する時「臨床心理学を勉強したら、どんな仕事につけますか？」という問いを多く耳にする。また、臨床心理学は臨床心理士になるための学問と捉える方も多い。臨床心理学が実際にどう役立つか、また社会人になる上でどう活かされるか、なかなかイメージしにくいようである。

しかし実際には、臨床心理“学部”での学び

は臨床心理士を目指すうえでの基礎固めとして、また社会人として就職する上で、それぞれの意義がある。

まず、臨床心理士を目指す場合は大学卒業後大学院への進学することが前提となるのだが、大学院進学前に現場を知る機会を得ることは大きな意味を持つ。というのも大学院の2年間で学ぶことは膨大で、大学院生はその忙しさに追われて学びを消化するゆとりを得にくい。そうした中、学部の頃から現場を知る経験を持つ学生は、問題意識や臨床心理学の基礎的学びがより実感の伴うものとして定着している。それは土壤がしっかりしている状態ともいえ、その上での大学院でのより専門的な学習を吸収しやすくなると思われる。

また大学卒業後に就職する際にも、臨床心理学の学びは活きるであろう。何故なら臨床心理学は悩みを持つ人々に限らず「人の心」と「人とのコミュニケーション」について学ぶ学問であるからである。社会において、顧客として人と関わる場合、組織として人と働く場合と、大抵そこには自分以外の他者がいる。そこに人がいる場合、臨床心理学で学んだ視点は多いに役立つであろう。

具体的に臨床心理学を学んだことが、どのよ

うに仕事につながるかは、希望する職域、関心の所在によってひとりひとり異なってくる。そしてそのつながりや答えは、臨床心理学を学ぶ中で各自が見つけていくものであるように思う。これを学んだらどう意味があるか。それは人に問うものでもなく、全員がひとつの答えを持つものではない。問題意識を持ち、その中で自分にできることを問い、人との関わりの中で実現する力が、臨床心理学を学ぶ上で重視される姿勢であり、学ぶことで獲得されるものである。

Ⅲ 総合考察

以上、本学で実施されている実習「心理学実験査定(初級)Ⅰ、Ⅱ」「臨床観察実習」について、“こころ”へのアプローチの違いから紹介した。最後に、これらの実習体験を経験することの意義とは何なのか?ここで改めて考えてみることにする。

まずは「心理学実験査定(初級)Ⅰ」で求められるような、客観的思考を身につけることが可能になるということ。“こころ”という、目に見えない現象を目に見える形にする、特に数量データに変換させることで、多くの人間に共通する、人間一般の普遍的なこころに関する現象を捉えて操作、分析し、他者に説明する体験は、科学的思考を養うとともに、自分のみの狭い考え方に捉われない自我の強さを身につけることが可能になる。

また、「心理学実験査定(初級)Ⅱ」では、上と一転して、他者との共通項ではなく、一人の人間をしっかりと見る力が養われる。特に実習では心理査定という既成のものさしを使って自身の心理的特徴を描き出し、それを対象化し記述する力(自分を対象化する力)が求められる。これは、自分の内面をみつめる作業を行う

こととなり、重さやしんどさを伴う体験ではあるが、こころを扱う学問に伴う心の痛みや生身の人間の心を扱う重みを知る機会となろう。自分自身を外から見る視点というものが養われることが期待される。

さらに、「臨床観察実習」における現場に足を運ぶ体験は、大学で学んだ心理学の知識や理論が、現場ではどのように生かされているのかを知ることとなり、臨床心理学という学問が机上の学問ではないことを知る契機となりえる。臨床心理学という学問が、実践現場から生まれた学問であることとの連関を、身をもって体験するのである。また、現場で働く人との交流を通して、学生自身が刺激を受け、普段の大学生活ではなかなか感じられない社会一般の常識にふれることも含め、社会とのつながりを意識する体験となる意義があろう。

以上、3つの実習授業を通して得られるものとして、①客観的なものの見方を身につけること、②自分の内面をみつめ対象化する力の養成、そして③学んだ内容と現場での実践や社会とのつながりを意識させられる経験をつむこと、があると考えられるが、これらはどのひとつが抜けてもバランスを欠くといえ、三者が一体となって展開されることで、バランスのとれた人間形成を図ることになるといえまいか。本学では、各種心理学やその他の社会科学分野の講義が開講されており、それらを通して理論を学ぶことができるが、そのような理論の勉強と合わせて、これらの実習を経験することにより、知的な理解と合わせて自らの経験や主観的体験を通した心理学の学びが深まることが期待される。このようなバランスのとれた授業の体験こそが、臨床心理学部のモデルとなることを期待したい。むろん、これらの授業のもつ意味とその位置付けは、臨床心理学部を卒業後、大学院に進学しより専門的な勉強をする者と、社会に

出る者とは異なる。前者にとっては、これらの学部での体験を基礎とし、その後臨床心理の専門家を志す上で、より専門的な学びへと深めることが求められよう。一方後者にとっては、学部での授業を通じて心理学的なものの見方を知り、自分も他者も含めた人の心、および対人コミュニケーションについて学んだ経験が、社会に出た後、それぞれの場面で人とかわり自分の力を発揮する上での礎となることが期待される。

なお、これらの実習は、教室の確保や大学院生によるティーチングアシスタントの位置づけ、プログラムの構成、施設見学先の充実など、まだまだ実質的な改善の余地が残されている。そして、履修する学生の声を聴きながら、今後これらの実習がより充実した“こころ”を体験できる機会となるよう取り組んでいきたい。

IV おわりに

今回取り上げた3つの実習は、それぞれ違う側面において、学生にかかる負荷の比較的大きな授業である。しかしそれだけに、学生の成長の機会となる可能性の高い授業である、ともいえる。「臨床心理学」は「生身の人間に親しく臨む、ことによって成立する学問であり、その学

びのプロセスは逆に「生身の人間」としての学び手の成熟を求める部分がある。

現在、「臨床心理学科」の他、「心理学科」や「教育心理学科」の中で臨床心理学を学ぶ学生も含めると、大学学部において臨床心理学を専攻する学生はかなりの数にのぼる。大学全入が現実のものとなる中、学部4年間の教育において何を指すのかということが大学にとっての課題にもなっている。社会に出る準備段階の存在としての大学生像を考えると、他者そして自分自身との関わりに開かれて生きていく力の基礎を築く、という点において、臨床心理学教育、中でも特に実習授業の果たせる役割について、今後も検討していく意義は大きいのではないだろうか。

引用文献

- 大塚義孝 2004「臨床心理学の成立と展開1」 大塚義孝他（編）『臨床心理学原論』 誠信書房．
- 河合隼雄 2003 臨床心理学ノート 金剛出版．
- 高石浩一 2000「心理アセスメント」 京都文教大学臨床心理学科（編）『ザ・臨床心理学科—大学で何をどう学ぶか』 創元社．
- 馬場天信 2005「心理学実験・査定から心理臨床家としての資質を磨く—「科学の知」に触れることの臨床心理学的意義について」 鏑 幹一郎（監）川畑直人（編）『心理臨床家アイデンティティの育成』 創元社．

Abstract

The Significance of Psychological Experimentation and Assessments, and Practical Experience Gained by Observation in the Clinical Psychology Department

Haruka SUDO, Sachiko OHTANI, Noriko TAKAHASHI

This report focuses on the benefits of seminars on psychological experimentation and psychological assessments, as well as practical experience gained by observation of clinical facilities.

Through these seminars, students can gain experience in using methods of psychological measurement, clinical psychological assessment, and thus, these experiences help them in increasing their knowledge on clinical psychology.

The benefits of these seminars are as follows. (1) It helps students gain an objective perspective. (2) It facilitates the attitude of reflecting themselves. (3) It helps students understand the connection between theoretical knowledge gained at the university and the community.

Practical experience as well as theoretical knowledge of psychology can benefit students. In clinical psychology, in particular, practical experience and theoretical studies are important.

Key words : Psychological experimentation, assessments, practical experience